

周恩来首相の死と中国

中嶋嶺雄

東京外国語大学助教授

「事はまさに実を務むべし」

(五代の宰相・馮道の訓言)

「柳同志、忍の一字だよ。……革命のためなら、われわれは妾になろう。必要とあらば、娼婦にもなるうではないか。」

(一九二七年五月、若き日の周恩来)



中国の希望の星、民衆の慈父

周恩来・中国國務院総理がついに病いに斃れた。去る一月八日の朝であった。翌九日の早暁、その訃報は全世界に伝わっていった。それを耳にしたときの感慨は、いうまでもなく人それぞれに多種多様であつたらう。ただ、周恩来の死を伝え聞いた多くの人びとは、そのとき、毛沢東主席の運命力の強さを改めて再確認したのではなからうか。皇帝と宰相、革命家と政治家、民族の顔と国家の顔、農村人と都会人、西郷と大久保……等々のアナロジーにおいてつねに比較対照されてきた毛沢東と周恩来。動乱の中国革命史と建国後の政治的激動のなかでのこの両者の運命的な関係——信頼と協力と批判と牽制との葛藤としての相互依存的・相互扶助的な関係——を顧みたとき、いまさらながらに毛沢東の運の強さと周恩来の死の重さを私は感ぜずにはいられなかった。そして願わくば、毛沢東以後の中国における周恩来の活躍ぶりを見てみたかったという思いは、さらにつのるのである。

平凡な言葉だが、周恩来は、あらゆる意味で、中国の希望の星だったといつてよい。中国民衆にとって、周恩来は毛沢東の厳父のイメージにたいする慈父のそれであり、ときには、すべてを理解し、すべてに細心の配慮をしてくれる母親のような存在でもあったといつてよい。この点で周恩来は、

しばしば不機嫌かつ気まぐれで我儘でもあった毛沢東の政治を、その盤石となつて精一杯支えながら、毛沢東政治の軌道の変形をいくたびか、修正し、欠損部分をつねに補修してきたのであった。この意味では、周恩来こそ、毛沢東政治への一貫した協力者であると同時に一貫した潜在的批判者であつたともいえよう。それだけに、中国民衆にとっては、毛沢東以後の時代の周恩来の生とその活躍にこそ期すべきものが多かったのではあるまいか。その苛烈な政治的現実に耐えきれず、中国大陸から香港へ逃れてくる難民のなかにさえ、周恩来を悪しざまに語る者はいないといわれるほど、周恩来は中国民衆に広く慕われた政治家であつた。

こうした周恩来への敬慕の念は、外部世界においてもほぼ共通している。わが国の多くの政財界人が周恩来にいかにか敬服していたかについては、いまさら語る必要はない。今日、あれほど激しい敵対関係にあるソ連でさえも、周恩来については、一九七三年夏、中国共産党十大会で周恩来が政治報告をおこなう前後の時期までは、周恩来を名指して批判したことは一度もなかった。去る一月二十三日にソ連のテレビ放送が周恩来論を試みたとき(アレクサンドル・カベルツネフ解説員)、周恩来は中ソ対立の今日のような状況にたいして責任があるとしながらも、「健全な知性の持ち主であり、中国革命に貢献した」ときわめて好意的に評価したこの報道にも、周恩来の幅広い政治的個性が物語られている。

ところで、周恩来は、内政的には激動の中国政治史の調停者として、対外的には中国外交の超人的な演出者として存在しつづけてきた。それだけに周恩来の死は、中国にとってかけがえない損失であるが、このような周恩来は、つねに中国という「民族・国家の命運」を切り開くため、そのような民族的・国家的使命感に立って、粉骨砕心、政治の激流のただなかに立ちつづけてきたのである。このことは、中国政治の重大な岐路にたったときの周恩来発言によっても明らかであろう。

周知のように、周恩来は、激動の中国現代史のなかで半世紀有余にわたり政治の最高指導者群の中に位置してきたが、このような周恩来にとって、最大の政治的試練を回顧するならば、中国革命の段階ではやはり一九三五年一月、長征途上の中国共産党遵義会議で紅軍つまり中国共産党の指導権を毛沢東に委ねた前後の時期であり、建国後は一九六六年の春から夏、文化大革命で実権派の領袖たちと袂をわかち、旗色を鮮明にして毛沢東に賭けた時期であったといえよう。

よく知られているように、フランスへの「勤工儉学」留学から帰った若き周恩来は、ただちに黄埔軍官学校政治部主任代理（校長は蔣介石、政治部主任は汪精衛）として頭角をあら

前面に押し立てたのであった。

毛体制の曲折を乗り切ったリアリスト

そのような歴史をもつ周恩来が建国後、大きな政治的岐路に立ったのは、やはり文化大革命の時期であった。毛沢東政治への最大の協力者で



ありながら毛沢東政治のマイナス面を同時に知りつくしていた周恩来は、いわゆる「三面紅旗」の「大躍進」政策が毛沢東によって主導され、それにはたいすの批判が彭徳懐・国防部長（当時）によって展開された五〇年代後半、「大躍進」政策には是々非々の立場をとった。やがて政治的には彭徳懐が失脚したものの、政策的には毛沢東の立場が修正され

らわし、一九二六～七年の中国革命の悲劇の時代には、一転して敵となった蔣介石側に二度も捕えられながら難を脱し、二七年八月、今日の建軍節の起源である南昌蜂起では党中央政治局員兼軍事部長として第一線でこれを指導した。以後、中国共産党の最高指導者が瞿秋白、向忠發、李立三、王明（陳紹禹）と相次いで交替した時期にも、周恩来は一貫して軍事・公安関係の最高責任者であった。つまり、実質的に党の権力を握っていたのである。その周恩来が遵義会議では、紅軍の軍事的敗北の責任をとって、年長であるとはいえ自分よりはるかに地位の低い毛沢東に党内指導権をいさぎよく譲ったのであった。このドラマが中国革命の大きな分岐点になったのであったが、周恩来は当時、こう述べたと伝えられている。「戦争に敗れたことは事実である。したがって、この作戦指導の任に当たった者は、軍事部長（周恩来自身のこと——引用者）を筆頭として、当然その責任をとるべきである。それにひきかえ、同志毛沢東、朱徳は、非常に巧妙な遊撃戦をもって、国府軍の攻撃をその都度撃退し、今日の紅軍を建設した業績はきわめて高く評価すべきである。敗戦を指導した責任者が去り、勝利を得た指導者がこれに代ることはいふまでもないことである。今後、紅軍の指導権を同志毛沢東に全面的に委ねることが、もっとも正しい道である」（一九三五年一月、中共中央遵義会議での発言）。こうして周恩来は、軍事部長の要職を退き、以後、一貫して毛沢東を政治指導の

て、六〇年代前半、劉少奇、鄧小平、彭真らの実権派（多数派）による経済調整政策が実行された時期には、本来的な穏歩前進派としてのリアリスト周恩来は、文化大革命にいたるまで、むしろ実権派に近い立場にあったのである。その周恩来がやがて実権派打倒への毛沢東の並々なぬ真意を知り、実権派から離反していった時期が六六年春から夏の時期だったのであり、この時期に訪中した日本共産党の宮本代表団が中国共産党と初めは一致していながら、最後になって決裂する場面とも、それは重なっていたのである。この点では、周恩来死去にさいし日本共産党が発表した談話のなかで、周恩来が両党の分裂に責任がある旨述べられていたことには、真実が含まれている。こうして、ひとたび毛沢東に賭けた周恩来は、六六年五月、文化大革命は「われわれの党と国家の運命と前途にかかわる第一義的な大問題である」と述べて文化大革命の大衆の高揚を支え、同年八月、紅衛兵の大群が出現して世界を驚かせた天安門広場の百万人大集会では、毛沢東および林彪をたたえてみずから毛沢東讃歌の音頭さえたったのである。

こうした周恩来の転換の直後、同年十一月に人民大会堂で開かれた孫文生誕百周年記念の記念式典では、この国事を主宰した周恩来が、同じ壇上の劉少奇、鄧小平を横目にみて、「革命家は、孫中山先生のように晩節をまっとうしなければならぬ」と力説し、毛沢東主席万歳をいくどかくりかえし

たのであった。

この記念式典に参列する機会を得た私には、このときの周恩来演説に苛立って禁煙のはずの人民大会堂の壇上でタバコをたてつけに吸っていた劉少奇の姿と、懽然たる表情でそれを聞きいていた鄧小平の姿が、「毛主席万歳、万々歳」を唱える周恩来のいささかうわずったハスキーな声とともに、つい先日のごとくに想い起される。

私はそのとき、周恩来ほどの人物がなぜこうも真剣に毛沢東への忠誠を誓わねばならないのかと思わずにはいられなかったが、やはり、そこには、周恩来なりの真摯な立場と、「党と国家の運命」の岐路に立ったときの切迫した使命感が潜んでいたであろう。

このような周恩来に、中国文学者の村松暎氏は、名著『五代群雄伝』のなかで、「事はまさに実を務むべし」この処世哲学によって、あの五代の権力者の興亡激しい時代を生き抜いた不死身の宰相・馮道の姿を生き映してみておられる。まさしくそのとおりであろうが、私には周恩来のリアリズムと使命感には、馮道流の現世的な処世哲学にプラスされた戦略構想が秘められていたような気がする。その戦略構想とは、文革から脱文革への過程のなかで顕著であった「毛沢東体制下の非毛沢東化」であり、米中接近に象徴される中国外交のダイナミックな展開、つまり「閉ざされた中国」から「開かれた中国」への転換であったのではなからうか。

ばならないというある種の暗黙の了解——私はそれを政治的凝集力とよんでいる——のもとに抑制されてゆくのではなからうか。

第二には、そのような内政上の拘束要因のもとで、周恩来はすでに過去一年近く、すでに政治の第一線を離れており、中国には周恩来なき中国を代行する集団的トロイカ型の政治指導体制がすでに形成されていると思われることである。つまり、王洪文、江青、姚文元、汪東興らの文革派を左翼に、葉劍英、李先念、余秋里、谷牧らの実務派を右翼に、この両者のバランスとしてのみならず政治指導の実質的中核として鄧小平、張春橋、羅瑞卿、喬冠華らの新旧実権派が存在するというかたちで一種の集団的トロイカ型のリーダーシップがすでに形成されていると思われる今日、周恩来なき中国がすでに内政上ビルト・インしているのだといえよう。

第三には、このようなリーダーシップのなかでもっとも有力な鄧小平、張春橋、喬冠華らの新旧実権派は、これら指導者の一連の演説を読んでもれば明らかのように、きわめてリアルな現実認識とオーソドックスな革命官僚としてのしたたかさや有しており、中国の将来を担い得る能力をすでに十分に身につけていると思われることである。

そして最後の、しかしもっとも重要な要因は、今日の中国が置かれている客観的・歴史的な環境であろう。この点では、昨年一月の第四期全国人民代表大会における周恩来政治

このような遠大な戦略を主導しつつあった七〇年前半の周恩来を見ていたとき、多くの専門家は、もしも周恩来が毛沢東の死に先立ったならば、中国にとってはきわめて困難な、あるいは不幸な事態が訪れるかもしれないと予想したものであった。

今後も「周路線」を基本に踏襲

それほどまでに、現代中国の内政・外交のキー・パーソンとしての周恩来の役割りは大きかったといえるが、しかし、今回、周恩来の死に直面して中国の将来を展望するならば、周恩来なき中国に当面、急激な変化はあり得ないように思われる。もとより、周恩来一流の政治的芸術の欠在によって、中国の内政・外交に潤滑油を欠いた機械のような硬さが出てくるかもしれない。だが、そうした懸念にもかかわらず、当面の中国の基本方向には大きな変化はないような気がする。

その第一の理由は、中国の内政面における拘束要因が、迫りくる毛沢東以後の時代を前にして大きく作用しはじめていくことである。最近の「批林批孔」運動から「水滸伝」批判、教育革命論争へのプロセスにもあらわれたように、今後中国にも「潮流」と「反潮流」の角逐がつづくであろうが、それらの起伏も、結局は、中国がここ当分は「安定団結」という基調において毛沢東以後の時代へ移行してゆかね

報告が示したように、国内の工業化、農業の近代化・機械化を中心とする現代的な経済体系の整備、建設の方向が、今日の中国にとっては、もはや後戻りのできない社会的・国家的要請であることを冷静に見極わめてゆかなければならない。

このような社会的・国家的要請こそ、今日の中国の客観的・歴史的な環境に規定されるのであって、こうした現実は、来るべき毛沢東の死をも含めて、いまや偉大な指導者の個性を超えて中国の将来を方向づけてゆくであろう。このような社会的・国家的要請は、中国の対外関係をより開かれた安定性において維持してゆくことを必要とするであろうし、すでに中国の対外貿易の八十五パーセントが日本、アメリカ、西欧など西側諸国を相手とするように変っている貿易構造一つをとってみても、このような方向をくつがえすことは困難であろう。

陳楚・駐日大使が帰国したままはや三カ月以上にわたって帰任せず、グロムイコ・ソ連外相の来日時にも不在であったことに示されるように、中国の内政・外交には、まだまだ曲折も起伏もあるであろう。しかし、基本的には「周恩来なき周恩来路線」こそ、後継指導者層がそのイデオロギー的偏差値を超え、踏襲すべき方向だと思われるのである。